The Journal of Kamakura Women's University, No.21, pp.114-128, March 2014

原著論文

源氏物語篝火巻―源氏と玉鬘の贈答歌「空と煙」―

柴村　抄織（教育学科）

要旨

源氏物語篝火巻には源氏から玉鬘への贈った歌がある。源氏は、自分の心情を庭園の篝火の煙に喩える。玉鬘も、玉鬘自身の状況についての考えを空と煙の和歌で返歌する。紫式部は、この表現によって玉鬘の人物造型を巧みに描写している。この表現の調査によって、贈答歌の新解釈を行った。

キーワード　源氏物語、玉鬘、篝火

はじめに

源氏物語の篝火巻にはこの巻名となっている篝火を詠んだ源氏と玉鬘の贈答歌がある。源氏の和歌は、「篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ」[1]、玉鬘の和歌は、「行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙となら ば」である。秋の情趣による恋の心情を炎に喩えていて、懊悩と情念の高まる場面[2][3]となっている。本研究では、恋情のみならず、玉鬘が母親の夕顔を背景において、詠んでいる和歌であることを考察する。玉鬘の返歌が玉鬘の状況を表し、それが人物造型につながっていることを述べたい。

玉鬘は、帚木巻～竹河巻の十七帖に登場する主要人物である。玉鬘は、三歳のときに母夕顔が亡くなった。帚木・夕顔・末摘花が幼年の時期[4]である。夕顔巻から十七年後、玉鬘巻に登場する。六条院に引き取られる娘の時期が、玉鬘十帖となる玉鬘・初音・胡蝶・蛍・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱である。鬚黒の北の方となる時期が若菜上・若菜下・柏木である。これに、後日譚の竹河巻が加わっての十七帖である。

玉鬘に夕顔の面影を読み取る期間は、諸説ある。①胡蝶巻以降に夕顔と玉鬘の比較がない説[5]、②常夏巻までは夕顔物語の規制によって物語が展開するが、篝火巻・野分巻は夕顔物語のもたらす条件を離脱する説[6]、③篝火巻の場面で源氏の心中奥深く流れていた時間が一度にたぐりよせられ、一瞬に顕在化し、夕顔への思慕は玉鬘によってのみ現実化する説[7]、〈ゆかり〉という位相で玉かつらは、夕顔という〈仮面〉を所有する説[8]である。また、死者夕顔の心残りを解消し、夕顔追悼の最後の巻として篝火巻を位置付ける説[9]がある。

本稿では、源氏側と玉鬘側で分けて考える。源氏物語全体には夕顔―玉鬘の系列は背景としてある。それがどの程度、各巻に内容として読み取るのか、ということである。篝火巻の源氏贈歌には、夕顔の面影を前面には出していないが、玉鬘の答歌には、母夕顔の面影を明確に読みとる説を提示したい。

玉鬘巻の冒頭部分は、「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔をつゆ忘れたまはず[10]」と源氏の夕顔追憶から始まる。「はかなく消えたまひにし夕顔の露の御ゆかり」（玉鬘巻　一二〇頁）であり、「玉鬘物語の冒頭から玉鬘が母夕顔を背後に背負って登場している一面を見逃したくないのである。[11]」この玉鬘の夕顔のゆかりが、篝火巻の贈答歌の背景にあるこ

とを考察する。そして、「空」と「煙」の表現が柏木巻の和歌に響いていることを述べる。

一　篝火巻の冒頭部分・父親としての源氏

篝火巻の冒頭部分は、源氏と内大臣との比較から書き起こされる。

このごろ、世の人の言ぐさに、「内の大殿の今姫君」と、事にふれつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞こしめして、源氏「ともあれかくもあれ、a人見るまじくて籠りゐたらむ女子を、なほざりのかごとにても、さばかりにものめかし出でて、かく人に見せ言ひ伝へらるるこそ、心得ぬことなれ。bいと際々しうものしたまふあまりに、深き心をも尋ねずもて出でて、心にもかなはねば、かくはしたなきなるべし。よろづのこと、もてなしがらにこそ、なだらかなるものなめれ」と、いとほしがりたまふ。　（篝火巻　二五五頁）

傍線部a「人見るまじくて籠りゐたらむ女子」からは、人目につくはずもなく家に籠っていたような女性、すなわち世間の評価のないまま人前に出たという意味につながる。ここで話題にされている内大臣の娘の近江の君は、これまで人目につかない存在だったが、世間から急に評価される状況となった。同じく、人目につかずそれまでの評判がなかった玉鬘は、源氏の配慮によって、世間からよい評価をされ、世の男性の恋の憧憬の対象となった。父親としては、内大臣よりも源氏に配慮があるという設定となっている。

また、近江の君の人から嘲笑されている世間の評価は、傍線部b「いと際々しうものしたまふ」という内大臣の人格から引き起こされたものとされている。ここで源氏の心用意は、内大臣より優れていることになる。近江の君の世間の評価は、父親の人格によって、人に嘲笑される評価となった。よって、実父内大臣よりも父親の立場として優れている源氏が玉鬘自身にも意識され、玉鬘の傍で見守る右近も、源氏の思慮深さを玉鬘に教えていることがわかる描写が続いていている。

かかるにつけても、「げによくこそと、親と聞こえながらも、年ごろの御心を知りきこえず、馴れたてまつらましに、恥ぢがましきことやあらまし」と、対の姫君思し知るを、右近もいとよく聞こえ知らせけり。　（篝火巻　二五五～二五六頁）

玉鬘は、実父内大臣のところにすぐに行っていたら、恥をかくようなこともあったにちがいないことを「思し知る」という言葉で、意識していることがわかる叙述である。冒頭部分では、父親としての源氏の思慮深さが強調されている。次に篝火巻の季節の情趣をみてみる。

二　秋の篝火

篝火巻の冒頭部分で父親としての源氏の優位性が叙述された後、物語は秋の情趣豊かな場面となる。

秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、c背子が衣もうらさびしき心地したまふに、忍びかねつつ、いとしばしば渡りたまひて、おはしまし暮らし、御琴なども習はしきこえたまふ。五六日の夕月夜はとく入りて、dすこし雲隠るるけしき、e荻の音もやうやうあはれなるほどになりにけり。　（篝火巻　二五六頁）

傍線部c「背子が衣もうらさびしき」は、「わがせこが衣のすそを吹返しうらめづらしき秋のはつ風」（古今集秋上、一七一、読人しらず）からで、秋の風がすそを吹き返して、うらの表面には見えない内心の奥底をみせる、という意味である。源氏の内心にある玉鬘への恋心が出て来て、忍びかねて、琴を教えているという秋の季節の恋の情趣である。

玉鬘の母親である夕顔と源氏が廃院に行ったときも八月十五夜の翌日の秋であった。

いさよふ月にゆくりなくあくがれむことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、fにはかに雲がくれて、明けゆく空いとをかし。はしたなきほどにならぬさきにと、例の急ぎ出でたまひて、軽らかにうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。（夕顔巻一五九頁）

秋の情趣の描写では、篝火巻の傍線部d「すこし雲隠るる」と夕顔巻の傍線部f「にはかに雲がくれて」の自然描写が重なっている。続く篝火巻の傍線部e「荻の音もやうやうあはれなるほど」は、「さらでだにあやしきほどのゆふぐれにをぎふく風のおとぞきこゆる」（後拾遺集秋上、三一九、斎宮女御　源氏注初句「秋のよの」第三句「たそかれに」第五句「身にしむ」の校異有、斎宮女御集初句「秋の日の」）を引歌とする。詞書は、「村上御時、八月ばかりうへひさしくわたらせたまはで、しのびてわたらせ給ひけるを、しらずがほにてことにひき侍ける」とあり、琴に関連しているところが同じである。荻の音が秋の恋を聴覚的に高めている。また、この荻の風の音は、この篝火巻では、玉鬘と源氏の恋の情趣に使われて、琴を枕にする親しさであるが、次の巻である野分巻では、反対に、明石の君の独詠歌に使われている。

端の方に突いゐたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、つれなく立ち帰りたまふ、心やましげなり。
おほかたに荻の葉過ぐる風の音もうき身ひとつにしむ心地して
と独りごちけり。（野分巻　二七七頁）

風の御見舞にきた源氏がすぐに帰ってしまった後の明石君の寂寥感に荻の音が使われている。篝火巻の玉鬘のときは、二人で琴を枕にする秋の恋の情趣であるが、明石君のときは、「憂き身」にしみる風の音となっている。この比較からも篝火巻は、秋の恋の情趣を優先させた解釈に導かれがちになるが、検討が必要である。源氏側の和歌は、恋の情趣でよい。が、玉鬘側は違うことに注目したい。篝火巻の続きの描写に戻る。

御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。かかるたぐひあらむやとうち嘆きがちにて夜ふかしたまふも、人の咎めたてまつらむことを思せば、渡りたまひなむとて、御前の篝火のすこし消え方なるを、御供なる右近大夫を召して、点しつけさせたまふ。
いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広ごり伏したる檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどに置きて、さし退きて点したれば、御前の方は、いと涼しくをかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。御髪の手当りなど、いと冷やかにあてはかなる心地して、うちとけぬさまにものをつつましと思したる気色、いとらうたげなり。帰りうく思しやすらふ。（篝火巻　二五六～二五七頁）

源氏は、琴を枕に玉鬘に添い臥した後、父と娘であるのにと、人に咎められると思い、帰ろうとする。そのときに、篝火が下火になっていることに気づいて、点燈させる。明るくなったときに、庭の遣水、檀の木、打松の庭の描写のあと、はっとするような玉鬘の美しい佇まいが源氏の心をつかむ。源氏は、父として引き取ったのだから、人の目を気にして帰ろうと思ったが、灯りのもとの玉鬘は、あまりにも美しく「帰りうく思しやすらふ」ことになり、篝火の煙に恋情を喩えて和歌を詠む。父としての立場にありながら恋心を持っている。

源氏が玉鬘に初めて対面したとき、「灯こそいと懸想びたる心地すれ」（玉鬘巻　一二九頁）とあり、源氏が懸想人の気分でいた[18]ことがわかる。このとき、右近が灯火をかきたてて、源氏が玉鬘の容貌を確認している。

源氏と玉鬘が会う場面に篝火や灯火が使われ、源氏の恋心と連動しているのである。玉鬘の姿が源氏の眼を通して描かれている。

三　源氏の和歌

源氏の和歌には、ことばがついている。

篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ
いつまでとかや。ふすぶるならでも、苦しき下燃えなりけり」と聞こえたまふ。　（篝火巻　二五七頁）

「ふすぶる」と「苦しき下燃え」は「夏なればやどにふすぶるかやり火のいつまでわが身したもえをせむ」（古今・恋一・五〇〇・読み人しらず　古今六帖では初句「夏くれば」）を引歌としている。蚊遣火を篝火として、苦しいほどの恋心を玉鬘に示している。

「ふすぶる」は、『名義抄』[14]に「燻・薫　フスフ」とあり、恋の苦しみを、火のくすぶる様子に喩えている。源氏の恋心は、心の奥底にくすぶって、ずっと燃えている。邸の庭の篝火が下火になったときは、表面的に恋心を抑えようとしたが、やはりまた庭の篝火を点して火を強くしてしまい、奥底にある恋心が表面に出て燃え上がっている。庭の篝火と源氏の恋情が重なり合い、弱く燻ぶる状況から下燃えがあるので、また燃え上がる恋心を情景描写で表現している。

「篝火」の「下燃え」には、他に「かがり火の影となる身のわびしきは流れてしたにもゆるなりけり」（古今530）（古今六帖1639かがり火の影となる身のわびしきはながれてしたにもゆるなりけり）があり、恋の苦しみを詠んでいる。こちらは、篝火の灯りになる身のわびしさが主題であるので、引歌は、「夏なれば」の古今集五〇〇番歌となる。

そして、「篝火」は、紫式部集[15]にも詠まれている。

その夜、池の篝火の御燈明の光り合ひて、昼よりも底までさやかなるに、菖蒲の香今めかしう匂ひ来れば

67　篝火の影もさわがぬ池水に幾千代すまむ法の光ぞ

公ごとに言ひまぎらはすを、向かひたまへる人は、さしも思ふこともしし給ふまじき容貌ありさま・齢のほどを、いたう心深げに思ひ乱れて

68　澄める池の底まで照らすかがり火のまばゆきまでも憂きわが身かな

紫式部集の「篝火」は、仏法の永久の光である。68番歌は、「日記歌（3番）によると大納言の君（源扶義女簾子、中宮生母倫子の姪）が「外見にそぐわぬ懊悩を抱えこんでいるのを式部はいぶかる。[16]」のである。

篝火は紫式部の主君の道長家の栄華を表わしているが、それに自分を比較して「憂き身」としている。また、向い合っている自分よりも若く、美貌の友人の悩みをみている。栄華の光がまばゆいほど、女性の憂いが際立ってくる。道長のような権勢のある家にいても、憂いがある。権力の家道長邸の庭の篝火の記憶は、自然描写に生かされているが、紫式部集の「篝火」は、恋の燻ぶるような苦しみではない。

紫式部日記[17]にも「十五日の月くもりなくおもしろきに、池のみぎは近う、かがり火どもを木の下にともしつつ（二九頁）」と庭の篝火の描写がある。これは、情景描写で、紫式部集の67・68番歌の背景がわかる。

源氏物語の「篝火」の12例を検討する。

1　若紫　月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、灯籠などにも参りたり。（二一一頁）

2　薄雲　いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふもをかし（四六六頁）

3　薄雲○【明石】いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひきにけん（四六六頁）

4　薄雲○【源氏】あさからぬしたの思ひをしらねばやなほ篝火の影はさわげる（四六六頁）

5　少女　中島のわたりに、ここかしこ篝火どもともして、大御遊びはやみぬ。（七四頁）

6　胡蝶　夜に入りぬれば、いと飽かぬ心地して、御前の庭に篝火ともして、（一六八頁）

7　常夏　月もなきころなれば、灯籠に大殿油まゐれり。【源氏】「なほ、け近くて暑かはしや、篝火こそよけれ」とて（二二九頁）

8　常夏　人召して、【源氏】「篝火の台一つ、こなたに」と召す。（二二九頁）

9　篝火　参照済　渡りたまひなむとて、御前の篝火のすこし消えがたなるを、

10　篝火　参照済【源氏】「篝火にたちそふ恋の煙こそ

11　篝火　参照済【玉鬘】「行く方なき空に消ちてよ篝火の

12　篝火　後に参照　御消息、【源氏】「こなたになむ、いと影涼しき篝火に、とどめられてものする」

例1は、月末で月の出が遅いため、篝火を焚いている様子である。例2は、篝火の火が蛍に見えると描写し、贈答歌へ繋げる。例3の明石の君の和歌は、「身のうき舟」として、紫式部集や紫式部日記の篝火の「憂き身」と通じている。ただし、篝火は権勢家の火ではなく、明石の浦の漁火を連想している。例4は、明石の君に源氏の下燃えとしての奥底がわからないから明石の君の心が乱れると答えている。「篝火のかげはさわげる」として、不安定な心情を表している。篝火の下燃えは、既に薄雲巻に出てきていた。例5は、朱雀院に行幸の折、篝火があちらこちらで焚かれ、盛会のうちに宴が終わった様子を表す。例6は、六条院の盛大な遊宴が夜を徹して行う様子が表れている。例7・8は、源氏が西の対で和琴を弾く場面である。灯籠の火よりも篝火の方が暑苦しくなくてよい、と言っている。例10は、篝火と立ちそふ恋心は、沈めようとしても下燃えがあって、また燃え上がる恋の炎であると表現している。例11は、その恋心を消してください、と返歌している。例12は、「いと涼しくをかしきほどなる光に（二五七頁）」をうけて、涼しいと感じる、ほどよい篝火を表している。

まとめると、源氏物語の篝火は、庭の描写、宴の盛会である様子の他には、心情としては、憂き身や恋心の不安定な気持ちを表現している。

そして、源氏の和歌の篝火は下燃えする燻ぶるような恋心を表している。源氏の和歌の第四句の「世には絶えせぬ」についてであるが、玉鬘世界を形成する景物である呉竹の用例[18]は、前栽の呉竹を見て夕顔を追憶する源氏、鬚黒のもとに去った玉鬘を呉竹の籬にかかる山吹で思い慕う源氏に使われている。胡蝶巻の源氏の和歌に「ませのうちに根深くうゑし竹の子のおのが世々にや生ひわかるべき（一八二頁）」とあり、いつか結婚をして別れる世を詠んでいる。玉鬘の歌は、「今さらにいかならむ世かわか竹の生ひはじめけむ根をばたづねん（一八三頁）」として、実父ではなく、光源氏を尊重する。胡蝶巻の贈答歌の呉竹の世が源氏の和歌に、篝火の場面に響いている。篝火巻では、実父内大臣を尋ねるその時期の「世」がきたが、源氏の恋心は、下に打ち消しの語を伴って、決して絶えることはない、娘として離れるこの時期が来ても恋情は燃えている、という意味になる。源氏は、夕顔追憶のゆかりの娘としての玉鬘に近づけば、源氏は近づきやすく、玉鬘も源氏を遠ざけにくく、近づいてくる。ただし、裏には、玉鬘個人を慕うことにはならない。夕顔追憶の延長にある恋心になるからである。反対に、夕顔追憶を離れて一人の女性としての玉鬘に近づけば、玉鬘は源氏を遠ざける。ただし、裏には玉鬘個人を慕うことになる。これは拒否される。源氏側には、篝火巻で、夕顔追憶はみられず、父としての立場を離れるときがきても、自分

の恋心はずっと下燃えで存在し、想ってきたと和歌で告げている。

次に、源氏の苦しい恋情を詠んだ和歌に対して、玉鬘の返歌を考察する。

四　玉鬘の和歌　煙にたぐふ　母夕顔との関連

女君、「あやしのありさまや」と思すに、

「g行く方なきh空に消ちてよ篝火のたよりにiたぐふ煙となならば人のあやしと思ひはべらむこと」とわびたまへば、j「くはや」とて、出でたまふに、東の対の方に、kおもしろき笛の音、箏に吹きあはせたり。

（篝火巻　二五七～二五八頁）

傍線部i「たぐふ煙」であるが、源氏が恋の煙としているのに対して、「たぐふ煙」としているのは、夕顔のゆかりを意識していると考えられる。夕顔巻に既に「煙にたぐひ」が出てきている。[18]

右近を、【源氏】「いざ、二条へ」とのたまへど、【右近】「年ごろ、幼くはべりしより、片時たち離れたてまつらず馴れきこえつる人にはかに別れたてまつりて、いづこにか帰りはべらん。いかになりたまひにきとか人にも言ひはべらん。悲しきことをばさるものにて、人に言ひ騒がれはべらんが、いみじきこと」と言ひて、泣きまどひて、【右近】「煙にたぐひて、慕ひ参りなむ」と言ふ。

（夕顔巻　一七九頁）

夕顔に仕えていた右近は、夕顔亡きあと、源氏の邸に身を寄せる。この場面に「煙にたぐひ」が使われ、夕顔の遺体を焼く煙と一緒にと言っている。また、亡くなった夕顔を想う源氏の独詠歌にも既に煙と空は詠まれていた。

空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくながめたまひて、

【源氏】見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつましきかなと独りごちたまへど、えさし答へも聞こえず。かやうにて、おはせましかばと思ふにも胸ふたがりておぼゆ。耳かしがましかりし砧の音を、思し出づるさへ恋しくて、「正に長き夜」とうち誦じて臥したまへり。

（夕顔巻　一八九頁）

夕顔の死を「煙」で表わし、「空」を眺めて追憶している。傍線部h「空に消ちて」、i「たぐふ煙」は、夕顔巻の表現が響いてきて、夕顔の死を表現していると考えられる。

煙は、勅撰集では、葬送の煙と恋情の煙どちらにも使われている。

「思いでの煙やまさんなき人のほとけになれるこのみみば君」（後撰和歌集巻第十七雑三・一二二六・真延法師）と醍醐天皇皇女で師輔の妻となった勤子内親王が九三八年三十五歳で没したときの歌で葬送の煙を表している。思いの火が多くなって雲となったするのは、「限りなき思ひのそらにみちぬればいくその煙雲となるらん」（拾遺和歌集巻第十五恋五・九七一）で、恋情の煙である。九七一番歌の御返しの歌で、「そらにみつ思ひの煙雲ならばながむる人のめにぞ見えまし」（拾遺和歌集巻第十五　恋五・九七二）ともに恋の歌である。円融天皇の御代、帝が少将更衣に自分の想いの煙が雲となると詠みかけ、返歌では、雲が見えないのは気持ちがないからと、切り返している。ここには、燻ぶるような息苦しい恋情はみられない。葬送の煙でなくても「空」と「煙」は一緒に使われている。紫式部集では、夕顔巻の源氏の独詠歌と同じことばを使った夫宣孝の死に対する挽歌がある。

世のはかなきことを嘆くころ、陸奥に名ある所々かいたる絵を見て、塩釜

見し人の煙となりし夕べより名ぞむつましき塩釜の浦（新古今）

塩釜の煙が夫の葬送の煙を思い出させることになっている。煙は、葬送の煙になっている。次に、源氏物語の煙の用例46例をみてみる。

1 桐壺　母北の方、同じ煙にのぼりなむと泣きこがれたまひて、（二四頁）

2 夕顔○参照済　泣き惑ひて、「煙にたぐひて慕ひ参りなん」と言ふ。（一七九頁）

3 夕顔○参照済　見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつましきかな（一八九頁）

4 若紫　はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、（二〇二頁）

5 花宴　そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣の音なひいとはなやかに（三六五頁）

6 葵　【源氏】のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな（四八頁）

7 賢木　いとの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。（一三二頁）

8 須磨　【源氏】鳥辺山もえし煙もまがふやと海人の塩やく浦見にぞ行く（一六八頁）

9 須磨　【大宮】亡き人の別れやいとど隔たらむ煙となりし雲居ならでは（一六九頁）

10 須磨○【尚侍】浦にたくあまだにつつむ恋なればくゆる煙よ行く方ぞなき（一九二頁）

11 須磨　煙のいと近く時々立ち来るを、これや海人の塩焼くならむと（二〇七～二〇八頁）

12 明石　塩焼く煙かすかにたなびきて、とり集めたる所のさまなり。（二六四～二六五頁）

13 明石　【源氏】このたびは立ちわかるとも藻塩やく煙は同じかたにびかむ（二六五頁）

14 澪標　あはれなりし夕の煙、言ひしことなど、まほならねど、その夜の（二九二頁）

15 澪標　【紫の上】思ふどちなびく方にはあらずともわれぞ煙にさきだちなまし（二九三頁）

16 蓬生　立ちとまる下衆だになし。煙絶えて、あはれにいみじきこと多かり。（三三〇頁）

17 松風　【入道】「煙ともならむ夕まで、若君の御事をなむ、（四〇六頁）

18 薄雲　燃えし煙のむすぼほれたまひけむはなほいぶせう（四六〇頁）

19 篝火　【当該歌】篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ

20 篝火　【当該歌】行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば

21 真木柱　【鬚黒大将】うきことを思ひさわげばさまざまにくゆる煙ぞいとど立ちそふ（三六九頁）

22 真木柱　女も、塩やく煙のなびきける方を、あさましと思せど（三八九頁）

23 梅枝　いと苦しき判者にも当たりてはべるかな。いとけぶたしや。（四〇八頁）

24 梅枝　数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、（四〇九頁）

25 若菜下　頭よりまことに黒煙をたてて、いみじき心を起こして加持したてまつる。（三三四頁）

26 柏木　○【後に参照】いまはとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ（二九一頁）

27 柏木　○【後に参照】立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるる煙くらべに（二九六頁）

28 柏木　○【後に参照】「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出

ならめ。（二九六頁）

29 柏木　○【後に参照】行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ（二九六～二九七頁）

30 柏木　御前の木立いたうけぶりて、花は時を忘れぬけしきなるを眺めつつ（三二八頁）

31 柏木　何かは、かかるついでに煙にも紛れたまひなむは、この御身のための（三三一頁）

32 鈴虫　火取どもあまたして、けぶたきまであふぎ散らせば、（三七五頁）

33 鈴虫　「空に焚くは、いづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ。富士の嶺よりもけにくゆり（三七五頁）

34 鈴虫　御身の苦しうなりたまふらむありさま、いかなる煙の中にまどひたまふらん（三八八頁）

35 鈴虫　やうやうさる御心ざしをしめたまひて、かの御煙はるくべきことをせさせたまへ。（三八九頁）

36 夕霧　なほ、峰の煙をだにけ近くて思ひ出できこえむと、（四四三頁）

37 夕霧　【落葉の宮】のぼりにし峰の煙にたちまじり思はぬかたになびかずもがな（四六三～四六四頁）

38 御法　限りなくいかめしき作法なれど、いとはかなき煙にてはかなくのぼりたまひぬるも、（五一〇頁）

39 幻　【源氏】かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ（五四八頁）

40 橋姫　【八の宮】見し人も宿も煙になりにしをなにとてわが身消え残りけん（一二六頁）

41 総角　外国（ひとのくに）にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしく思さるる。（三一二頁）

42 総角　言ふかひなくて、ひたぶるに煙にだになしはててむと思ほして、（三二九頁）

43 総角　限りのありさまさへはかなげにて、煙も多くむすぼほれたまはずなりぬるもあへなしと（三三〇頁）

44 宿木　昔ありけん香の煙につけてだに、いま一たび見たてまつるものにもがな（三八二～三八三頁）

45 宿木　むなしき空にのぼりぬる煙のみこそ、誰ものがれぬことながら、（四五五頁）

46 蜻蛉　この案内知りたる法師の限りして焼かす。いとはかなくて、煙は果てぬ。（二一二頁）

例1は、桐壺更衣の葬送の煙である。桐壺更衣の母君の心情を表している。例2・3は、夕顔の葬送の煙を表す。例4は若芽の萌え出ている様子。例5は薫物の煙。例6は、葵巻の葵の上が亡くなったときの葬送の源氏の独詠歌である。葬送の煙を表す。例7は、薫物の煙。例8は、源氏の歌で、須磨出立前に葵の上の葬送の煙を想い出している。例9も同じく大宮が思いだす葵の上の葬送の煙である。例10は人目を包む恋で燻ぶる恋の煙である。不安定な恋を表している。例11・12は、海人の塩焼きの煙を表す。例13は、源氏から明石の君への和歌で、同じく塩焼きの煙であるが、明石の君に都で一緒になりましょう、としている。「同じ方」とすることで、行方のわかる、約束する歌となっている。例14は、源氏が紫の上に、明石の君のことを語っている。ここでの煙は、帰京前の心にしみ入る情景となっている。例15は、明石の君のことを知った紫の上が「なびく方」として、死んでしまった方がよかったかしらと、煙を死と表している。例16は、末摘花の邸が零落して、炊事の煙もないことを表している。例17は、明石入道が明石の姫君のことを荼毘の煙となるまで祈る、というときに使われている。葬送の煙を表している。例18は、源氏が斎宮女御に話しているときで、六条御息所の源氏への愛執の苦悩を指している。燻ぶるような恋情を表す。例19・20は当該歌である。

例21は、北の方に火取りの灰をかけられた昨夜のことを思い出している。後悔の念としての燻ぶる思いである。直前に鬚黒大将の召人が薫物をしつつ、「こがるる胸の苦しきに」と鬚黒大将の北の方の嫉妬を代弁している。例22は、古今集の引歌で鬚黒大将との結婚が予想外であることを表す。例23は、薫香の縁語で窮屈な意味である。例24も、薫香の煙である。例25は、紫の上が危篤のときに験者が頭から煙を立てるほど切実な様子を表す。例26・27・28・29は後に参照する。例30は、柏木追悼の場面で、梢の芽ぶく様子である。例31は、柏木葬送の煙に妻の落葉の宮も一緒にという意味である。例32は、火取り香炉をあおいでけぶたい様子である。例33は、空薫物（室内の薫香）の煙である。例34・35は、六条御息所が地獄の業火のなかにいる煙である。例36・37は、一条御息所の葬送の煙である。例38・39は、紫の上の葬送の煙である。（例39は手紙を焼く煙の意も含む）例40は、八の宮の北の方の葬送と邸炎上の煙である。例41は、反魂香（魂を呼び戻せる香）を手に入れたいとして香の煙を表す。例42・43は、大君の葬送の煙である。例44は、大君を想って例41と同じ反魂香が出てくる。例45も、大君の火葬の煙である。例46は、遺骸のない浮舟の葬送の煙である。

源氏物語の「煙」は、桐壺更衣の葬送の煙や葵の上が亡くなったとき、夕顔が亡くなったとき、柏木が亡くなったときに使われている。（他に一条御息所、紫の上、八の宮の北の方、大君、遺骸のない浮舟）そして、人目を包む恋で燻ぶる恋の煙として、朧月夜から源氏への和歌で使われている。不安定な恋を表している。また、六条御息所の燻ぶるような苦悩を表している。篝火巻では、玉鬘に対する源氏の人目を包む恋情のときに使われている。

玉鬘の答歌、傍線部g「行く方なき」であるが、玉鬘巻で、乳母が「母君の御行く方を知らむとよろづの神仏に申して」として、行く方は、夕顔の行く方となっている。

源氏物語の「行く方」の用例35例をみてみる。

1　夕顔　若君の上をだにえ聞かず、あさましく行く方なくて過ぎゆく。（一九四頁）
2　若紫　幼かりつる行く方の、なほたしかに知らまほしくて、（二一三頁）
3　若紫　ただ、「行く方も知らず、少納言が率て隠しきこえたる」（二六〇頁）
4　葵　行く方なしや」と独り言のやうなるを（五五頁）
5　須磨　【源氏】唐国に名を残しける人よりも行く方知られぬ家居をやせむ（一八六～一八七頁）
6　須磨　そこはかとなくさへづるも、心の行く方は同じこと、何かことなるとあはれに見たまふ（二一四頁）
7　須磨　海の面うららうらとなぎわたりて、行く方もしらぬに、来し方行く先思しつづけられて（二一七頁）
8　明石　ただ行く方なき空の月日の光ばかりを、古里の友とながめはべるに（二三三頁）
9　明石　言はむ方なく恋しきこと、いづ方となく行く方なき心地したまひて、（二三九頁）
10　明石　夜はすくよかに起きゐて、「数珠の行く方も知らずなりにけり」とて、（二七一頁）
11　玉鬘　かの西の京にとまりし若君をだに、行く方も知らず、ひとへにものを思ひつつみ、（八八頁）
12　玉鬘○　母君の御行く方を知らむとよろづの神仏に申して、（八八頁）
13　玉鬘　来し方も行く方も知らぬ沖に出でてあはれいづくに君恋ふらん（九〇頁）
14　玉鬘○「母君のかひなくてさすらへたまひて、行く方をだに知らぬかはりに、（九五頁）

15 玉鬘　「年ごろ御行く方を知らで、心にかけぬ隙なく嘆きはべるを（一三〇頁）

16 蛍　ものはかなかりける親の心にひかれて、らうたげなりし人を、行く方知らずなりにたること。（二一九頁）

17 篝火　【当該歌】「行く方なき空に消ちてよ篝火の

18 野分　昨夜見棄てがたかりし花どもの、行く方も知らぬやうにてしをれ臥したるを（二七四頁）

19 藤裏葉　なれこそは岩もるあるじ見し人のゆくへは知るや宿の真清水（四五六頁）

20 若菜上　年月の行く方も知らず顔なるを、かう数へ知らせたまへるにつけては（六一頁）

21 柏木○【後に参照】行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ（二九六～二九七頁）

22 柏木　【御息所】この春は柳のめにぞ玉はぬく咲き散る花のゆくへ知らねば（三三三頁）

23 御法　誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我一人行く方知らずなりなむを思しつづくる、（四九九頁）

24 幻　【源氏】大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ（五四五頁）

25 橋姫　何やかやと尽きすまじかりけれど、行く方もなくはかなく失せはてて、（一二四頁）

26 浮舟　はやうほのかに見し人の行く方も知らずなりにしが、大将に尋ねとられにけると（一一六頁）

27 浮舟　【浮舟】橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ（一五一頁）

28 浮舟　君は、さてもわが身行く方も知らずなりなば、誰も誰も、あへなくいみじと（一六八頁）

29 蜻蛉　うち棄てたまひて、かく行く方も知らせたまはぬこと。（二〇六頁）

30 蜻蛉　「さらに何のかひはべらじ。行く方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ。（二一一頁）

31 蜻蛉　【薫】ありと見て手にはとられず見ればまた行く方も知らず消えしかげろふ（二七五頁）

32 手習　【浮舟】心こそうき世の岸をはなるれど行く方も知らぬあまのうき木を（三四二頁）

33 手習　また、その人かの人のむすめなん行く方も知らず隠れにたる、（三五二頁）

34 手習　そことだに尋ね聞かまほしくおぼえはべるを、行く方知らで、思ひきこえたまふ人々はべらむかし（三六二頁）

35 夢浮橋　この人は、見や忘れたまひぬらむ。ここには、行く方なき御形見に見るものにてなん（三九二頁）

例1は、夕顔亡き後の玉鬘の行方である。例2は、紫の上の将来この先である。例3は、紫の上がどこにいるかわからないことを表す。例4は、頭中将が葵の上が空のどこに行ってしまったのかとする。例5は、源氏がこれから先のことを不安に思っている。例6は、海人と源氏の心の向かうところ（身の上のつらさ）が同じという意味である。例7は、はてもない、行く先の不安定さ、つらさである。例8は、明石の入道への源氏の返事で行方はるかな月光の意味である。例9は、源氏が京の池水を思い出し、恋しさがどこまでもという意味である。例10は、明石の入道の数珠の置き場所の行方の意味である。例11は、玉鬘の行方である。例12は、母夕顔の行方である。例13は、夕顔に向けての歌で、不安定な状況を表す。例14は、母夕顔の行方がわからないときに使われている。例15は、源氏が玉鬘と対面の折に玉鬘の行方としての意味である。例16は、内大臣が玉鬘の行方を心配している。例17は、当該歌である。例18は、野分で花がしおれている様子を表している。例19は、故大宮の行方

を知っているかという意味である。例20は、年月が過ぎてゆくことである。例21は、柏木の和歌で後に参照する。例22は、落葉の宮の母御息所の和歌で、花の咲き散る行方とし、柏木追悼歌である。例23は、紫の上の死の至り着くところがわからない様子を表す。例24は、源氏による紫の上の魂の行方を幻術士にさがしてほしいとする。例25は、八の宮の財宝が散逸したことを表す。例26は、匂宮による浮舟の行方である。例27は、浮舟の和歌で自己の身の上の不安定さを表している。例28は、浮舟が、自分が行方知らずになったらとしている。例29は、乳母による浮舟の行方を案じる意味である。例30は、行く果ても知れない大海原で、浮舟の行方を心配している。例31は、薫による巻末独詠歌で、宇治の八の宮の女性三人との恋のはかなさを表す。例32は、浮舟の和歌で行方がわからない自分の身の不安定さをいう。例33は、中将によるもし、誰それの娘が行方しらずになったら噂になるという意味である。例34は、妹尼が浮舟に向かって浮舟の行方がわからず心配している人々がいるでしょうと話す場面である。例35は、薫の手紙による浮舟への想いで、浮舟の行方である。

源氏物語の「行く方」は、心に掛けている人、心配している人に使われている。そして、自己の行く先や将来が不安定で心配なときに使われている。死の至るところ、魂の行く方として使われている。また、登場人物が他者を心配しているときに使われている。心配されている対象の登場人物は、夕顔、紫の上、玉鬘、浮舟といった、親などの確固とした庇護者がない登場人物である。

紫式部日記の「行く方」の例は、「馬の中将の君をさきにたてたれば、ゆくへもしらずたとたどしきさまこそ、わが後ろ（六〇頁）」で、おぼつかない足取りの様子である。

紫式部集にある「行く方」の例をみる。「行く方」は、亡くなった友人の挽歌に使われている。

遠き所へ行きにし人の亡くなりにけるを、親はらからなど帰り来て、悲しきこと言ひたるに

39　いづかたの雲路と聞かば尋ねまし列離れけん雁が行く方を（千載集）

この和歌は、「ここでの『雲路』『列』『雁』の縁語に織りなされた、雁が姿を消し去った後の茫漠たる雲天の景は、死の世界へ離れ去った者を思う悲しくも虚しい心象風景となっている。[19]」と解釈される。

紫式部集には、越前に行った紫式部と九州に行った女友達との交流がみられ、女友達を玉鬘として物語に再生して、幸福にしたのではないかと考えられる。

筑紫に肥前といふところより、文おこせたるを、いとはるかなるところにて見けり。その返りごとに

18　あひ見むと思ふ心は松浦なる鏡の神や空に見るらむ（新千載集）

返し、又の年持て来たり。

19　行きめぐり逢ふを松浦の鏡には誰をかけつつ祈るとか知る

18・19番の友達が39番の友達と同一人物であるなら、九州に行った友達が当地で亡くなった説が出てくる。玉鬘の筑紫下向の必然性は作家紫式部側にあった。[20]

玉鬘に友人の九州行きを組み込み、京都に帰京させ、貴公子たちに求婚され、貴公子たちを惑わせ、東宮の兄である鬚黒の大将と結婚させた。紫式部は、遠方にいた友人を喪った悲しみを物語のなかで幸せにし、当時同じような境遇にいた女性への慰めとなったのではないか。

ここまでのことを踏まえて、篝火巻の玉鬘の答歌「行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば」を解釈する。通常は、「果てしない空に消して下さいませ、篝火とともに立ち上る煙とおっしゃるならば」である。

これをg「行く方なき」を母夕顔の行く方がわからなくなっている子ども時代を含み、h「空に消ちてよ」で、母の空に源氏の恋心を消してほしい、「篝火の」下燃えのある人目を包む燻ぶる恋心をi「たぐふ煙」母夕顔の葬送の煙として、「母夕顔の行く方となった空に恋心を消してくださいませ、父という立場のある人目を包む恋心を。下燃えという燻ぶる恋心、亡き母夕顔を愛していたというお気持ちがあるならば」と解釈できる。

この玉鬘の答歌のあとの源氏の対応だが、j「『くはや』とて、出でたまふに、」としか書かれていない。源氏には夕顔の面影はないが、玉鬘の答歌には夕顔の面影がある、ということになる。このあとの叙述はk「おもしろき笛の音、箏に吹きあはせたり」とあり、秋の音楽の場面となる。

御消息、【源氏】「こなたになむ、いと影涼しき篝火に、とどめられてものする」とのたまへれば、うち連れて三人参りたまへり。

【源氏】「l風の音秋になりけりと聞こえつる笛の音にm忍ばれでなむ」とて、御琴ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。

（篝火巻　二五八頁）

傍線部l「風の音秋になりけり」は、「秋きぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」（古今集秋上、一六九、藤原敏行）で、涼風という実感的景物をだし、恋の心情、追憶から実感へと巻が終わる。「忍びかねつつ」という源氏の玉鬘訪問のことばが、m「忍ばれで」と巻の最初と最後が、恋情への忍びから、秋の季節にふさわしい音楽に忍ばれで、となり、場面がまとまっている。

不安定なさすらいの玉鬘、九州から六条院に物理的に滞在しても、実の父ではないため、また場所を移す可能性があり、精神的には人目には源氏の娘とされながらも、事実は、恋の相手となっている不安定さがある。玉鬘は、母の面影を答歌に組み込むことで、自らの母夕顔の系譜を示し、源氏の恋心を退けたかったと考察できる。この「空」の解釈について、「行く方向もわからない広い大空に消してほしい、篝火の煙の立ちのぼるついで（たより）に、つれ立って一緒に立ちのぼる恋の煙であるという事であるならば。」（岩波旧大系[21]四一頁）となると、将来のわからない不安定な恋になる。また、「私への恋は虚空で雲散霧消させて下さい、それが篝火とともに立ち上る煙だというのなら。」（岩波新大系[22]三〇頁）は、「虚空」とする。なぜ「空」なのかということを明確にしたい。やはり「空」の解釈は、亡き母夕顔の葬送の煙を想い出す「空」であろう。

そして、この空と煙の表現は、柏木巻の和歌に響いている。

五　空と煙　柏木の和歌との関連

柏木が女三宮との恋を「一つ思ひに燃えぬしるし（二九〇頁）」として、「火」が「燃える」ことに喩えたあと、それに響くような表現の和歌を柏木は女三宮に贈っている。

いまはとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

（柏木巻　二九一頁）

人目を包む恋の火が燃えている、下燃えで続けて燃えている恋情を表している。この柏木の和歌に対する女三宮の返歌をみてみる。

【女三宮】「心苦しう聞きながら、いかでかは。ただ推しはかり。残

らむ、とあるは、

立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるる煙くらべに後るべうやは」とばかりあるを、あはれにかたじけなしと思ふ。

（柏木巻　二九六頁）

「立ちそひ」は篝火巻の源氏歌の「篝火にたちそふ恋」として、消そうとしても燃え上がる恋心を表していた。柏木は女三宮からの消息にあった「煙くらべ」をお互いの愛情に解釈する。

【柏木】「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。はかなくもありけるかな」と、いとど泣きまさりたまひて、御返り、臥しながらうち休みつつ書いたまふ。言の葉のつづきもなう、あやしき鳥の跡のやうにて、

【柏木】行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ
夕はわきてながめさせたまへ。咎めきこえさせたまはむ人目をも、今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」

（柏木巻　二九六～二九七頁）

柏木の和歌[23]「行く方なき空の煙……」は、魂となってもあなたを想うという、死と隣り合わせの激しい恋情を表現している。篝火巻の玉鬘の「行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば」に表現された「空」と「煙」を使っている。源氏物語の文脈的な意味の煙は、葬送の煙と、人目を包む恋の煙・燻ぶるような恋のどちらかであったのが、篝火巻によって、両義を兼ね備えた。篝火巻では、源氏の恋情と母夕顔の葬送の煙として、意味の内容は、分かれていたが、柏木巻では二つの意味が、恋によって死んで煙となるというように、より激情の恋となっている。煙となった自分を夕べには眺めてほしいという柏木の絶唱となっている。篝火巻では、下燃えという時間の継続だけであったが、柏木の和歌では、永遠の継続となっているのである。

まとめ

篝火巻の源氏の贈歌には、夕顔の面影を前面には出していないが、玉鬘の答歌には、母夕顔の面影を明確に読みとる説を提示した。

実父内大臣よりも父として配慮がある源氏が冒頭部分に描かれ、それがかえって人目を包む恋となっている。秋は、夕顔と源氏が廃院に行った季節であり、篝火巻の秋の季節と重なっている。篝火は、沈めようとした恋心が下燃えしていて、また燃え上がる燻ぶるような苦しい恋心の状況を表している。篝火の庭の描写と源氏の恋心が一致し、源氏は自分の心を篝火に喩えた。この和歌に対する玉鬘の返歌は、恋情の煙をしりぞけ、葬送の煙を詠み、夕顔のゆかりを意識している。右近のことばの「煙」、源氏の夕顔追悼独詠歌の「煙」「空」と関連している。この独詠歌は、紫式部の夫宣孝挽歌とも関連している。「行く方」も母夕顔の行く方として使われていた。紫式部集には、物語の登場人物・玉鬘として再生させた九州の友人が亡くなったときに使われている。

玉鬘の和歌の解釈を「母夕顔の行く方となっている空に恋心を消してください。篝火のように下燃えのある燻ぶる恋心を。母夕顔の葬送の煙を想い出して」と解釈した。玉鬘は、母の面影を答歌に組み込むことで、自らの系譜を示し、源氏の恋心を退けたかったと考察した。夕顔のゆかりを意識することで、かえって自己の意志を明確に伝え、母夕顔とは違った人格を浮き彫りにしている。母夕顔は、源氏の言うままに廃院についていき、命を落とした儚い女性であるが、玉鬘は、源氏の娘から内大臣の娘、東宮の兄の妻となった。紫式部は、玉鬘の人物造型を夕顔ゆかりの「空」と「煙」で効果的に描出した。

源氏物語の煙は、葬送の煙と恋情の煙どちらにも使われている。篝火巻の「空」と「煙」の表現が柏木巻の和歌にも響いている。柏木の心情も女三宮の心情と、煙くらべとして煙に喩えられている。柏木の恋は死

と隣り合わせの激しい恋情で、葬送の煙と燻ぶる恋情を二つに分けることなく同一で表現されている。篝火巻で連動していた、煙の二つの意味が、柏木巻では燻ぶるような苦しい恋と葬送の煙の隣り合わせとなり、恋死という主題を表現し、巻を越えて響いているのである。

注

(1) 以下、源氏物語の本文の引用（傍線を付けたところがある）は、新編日本古典文学全集『源氏物語③』校注・訳 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 小学館 一九九六年一月一〇日による。『源氏物語①』一九九四年一月『源氏物語②』一九九五年一月『源氏物語④』一九九六年十一月『源氏物語⑤』一九九七年七月『源氏物語⑥』一九九八年四月

(2) 小町谷照彦「光源氏と玉鬘(1)」「光源氏と玉鬘(2)」『講座 源氏物語の世界〈第五集〉』秋山虔・木村正中・清水好子編 有斐閣 昭和五十六年八月二〇日 光源氏と玉鬘をめぐる歌に「筋」が繰り返して用いられている。一四三頁
光源氏の玉鬘との贈答歌数は一一、贈歌に対して相手からの答歌があって贈答が成立しているのは九（鬚黒の代作答歌を入れれば一〇）、玉鬘から贈歌されているのは光源氏の二だけである。二〇三頁、二一四頁

(3) 西木忠一「篝火にたちそふ恋の煙」『樟蔭国文学』三十一 一九九四年三月二〇日 七頁

(4) 吉海直人「玉鬘物語論―夕顔ゆかりの物語」『國學院大學大学院紀要文学研究科』十一、昭和五十五年

(5) 注4に同じ。一〇四頁

(6) 藤本勝義「玉鬘物語の構造についての試論」『中古文学』九 昭和四十七年五月 二六頁

(7) 松村武夫「篝火」巻論『源氏・寝覚・栄花』笠間書院 昭和五十三年 一〇頁

(8) 辻和良「〝玉かつら〟考―〈仮面（おもて）〉、そして〈無縁性〉」『名古屋平安文学研究会会報』十五 一九八六年 二〇頁

(9) 塩見優「『源氏物語』篝火巻における死者の影」『学習院大学国語国文学会誌』五十五号 二〇一二年

(10) 注4に同じ。末摘花巻冒頭部分と玉鬘巻冒頭部分との類似。九五頁

(11) 長谷川政春「さすらいの女君」『講座 源氏物語の世界〈第五集〉』秋山虔・木村正中・清水好子編 有斐閣 昭和五十六年八月二〇日 五〇頁

(12) 以下、勅撰集の和歌の引用は、『新編国歌大観』新編国歌大観編集委員会 CD-ROM版 Ver.2 による。角川書店 二〇〇三年六月「源氏注」もこれによる。

(13) 注2に同じ。一四〇頁

(14) 『五本対照類聚名義抄和訓集成四』編者 草川昇 汲古書院 平成十三年七月三十一日

(15) 木村正中・鈴木日出男・後藤祥子・小町谷照彦・秋山虔「紫式部集全歌評釈」『國文學 解釈と教材の研究』第二十七巻第十四号十月号 昭和五十七年十月二〇日 學燈社

(16) 注15に同じ。一二〇頁

(17) 山本利達『紫式部日記 紫式部集』新潮古典集成 新潮社 昭和五十五年二月十日

(18) 注2に同じ。二〇四頁

(19) 注15に同じ。一一〇頁

(20) 注11に同じ。五四頁

(21) 日本古典文学大系16『源氏物語三』山岸徳平 岩波書店 昭和三十六年一月六日

(22) 新日本古典文学大系21『源氏物語三』校注 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎 岩波書店 一九九五年三月二〇日

(23) 奥村英司「『恋死』という永遠の生―『源氏物語』柏木論のために―」『鶴見大学紀要第一部国語国文学篇』三十一号 一九九四年 永遠の執着心を一首にこめる。一七頁

（二〇一三年十月一日受稿）

A Study of the *"Kagaribi" Chapter of The Tale of Genji*: "The Sky and the Smoke," the Poems Exchanged between Hikaru-Genji and Tamakazura

Saori Shibamura
Department of Education,Kamamura Women's University

Abstract

In the *"Kagaribi"* Chapter of *The Tale of Genji Hikaru-Genji* presents his *waka* poem to *Tamakazura*. In the poem he compares his affection for her to the smoke of a bonfire in the garden. In reply she too makes a poem in which she compares the relation between them to the sky and the smoke. In this paper I will make it clear how skillfully *Murasaki-Shikibu* portrays the character of *Tamakazura* in this poetical exchange which also gives an important clue to a new interpretation of the exchange of *waka* poems.

Key words: *The Tale of Genji, Tamakazura,* bonfire